

ディスレクシア (Dyslexia) とは……………

知的に問題がなく、聴覚、視覚の知覚的機能は正常なのに、
 読み書きに関して特徴のあるつまずきや学習の困難を示す症状のことをいいます。

EDGEは……………

ディスレクシアの正しい認識の普及と教育的な支援を目的とした特定非営利活動法人 (NPO) として、
 2001年10月に認証・設立され、活動しています。

EDGE USA 誕生

内藤 雅有

ある初夏の午後、ニューヨーク郊外の住宅地にある教会の一室でEDGE USAの第一回ミーティングが持たれました。といっても、ディスレクシアに何かの形で関係し、あるいは興味を持った何人かが他の障害の会とは別に集まろう、と呼びかけあって集まっただけで、特にそれを今後どうしようということ真剣に議論しようという集まりではありませんでした。そんなわけで、ミーティングはほとんどが身近な人や自分自身の苦労話や笑い話、でもしっかりお互いを知り合えた大事な時間でした。

ここ数年来、日本人家庭を対象に、米国私立学校やディスレクシアに関するセミナーを開いてきました。一昨年の秋には藤堂さんにも登場いただき、セミナーを開いていただきました。当地で、自閉症等他の高度機能障害を持つお子さんの家庭をサポートする会にも混じって活動してきましたが、やはりディスレクシアと他の障害とを混ぜて議論すると、お互いに無駄な時間も多くなることから、ディスレクシアサポートは日本のEDGEと同じように独立してやっていこう、という気持ちが高まっていました。

当地の大学院で教育心理学を学び、塾の先生をしている長谷川純子さん、インドやフロリダで子供を対象としたボランティアを経験し、EDGEでもお手伝いしていた木村優子さん、日本人学校でSpecial Educationを担当している佐藤壮康先生、ダンサーの織田きりえさん、オブザーバー参加で主婦の大樫さん、そして内藤というメンバーに、最近EDGEでのインターシップから戻られた、ミシガン大学博士課程で文化人類学の側面からディスレクシアを研究中の照山絢子さんを加えた、ばらばらな背景を持ったメンバーの集まりです。まだ全員が一緒に顔を合わせたこともない状態なので、何をやっていくかも全く決まっていません。この投稿を機に、活動方針をまとめてみました。これも本当に議論を尽くしたものではないため、活動の中で柔軟に方向修正していくつもりです。



新発売 発達に軽度のハンディをもつ子どもたちのための教材集

特別支援の国語教材 (初級編) 1-87211
特別支援の算数教材 (初級編) 1-87212

- 各¥10,500 (税抜¥10,000)
- 各巻構成：B4判・シート100枚裏表印刷200アイテム・ケース付き
- 監修：緒方明子 (明治学院大学教授)
- 著者：伊庭葉子 (さくらんぼ教室)

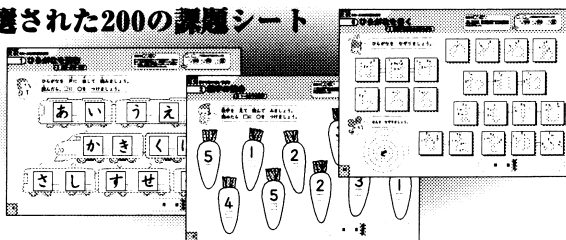
小学校・低学年段階のつまずきを乗り越えるために精選された200の課題シート

●教材内容の特色 (国語、算数共通)

- ・できる喜びを感じてもらうことを何よりも優先させた教材集。
- ・認知特性や集中できる時間に配慮した1シート1課題の作り。
- ・どこにつまずきがあるかを診断するための教材も充実。
- ・生活に生きる力に結びつく教材にも配慮した編集。

※個別の指導計画に役立つチェックリスト付き。

コピーして
 何處でも使える
 学習シート



学研 学校教育事業部

〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15 TEL (03)3726-8560 FAX (03)3726-8873
 ■学研特別支援教育・自立をめざして! <http://kids.gakken.co.jp/campus/jiritsu/>

- ① 日本人学校など、身近な日本人向け教育機関の特別教育担当者との意見交換
- ② 一般の先生への面談 啓発活動
- ③ 高校等年齢幅の拡大
- ④ YMCA等の団体との関係構築
- ⑤ 企業・組織への認知度向上

LDのサポートというと、対象児童や保護者への直接的なものに走りがちですが、教育者への啓蒙活動を第一とするということが上の活動方針の趣旨です。日本で非常に多い、クラスが荒れるという状況を良くするのに最も効果があるのは先生の認識を高めること、という事実があるそうです。限られた活動で成果を求めるには、効率的な手法をとるべきという判断をしました。日本人学校には全国の公立小中学校から意欲のある先生方が20人弱派遣されています。この先生方に、できるだけのことを知って帰ってもらおう、というのが上①、②。まずは①で専門の先生方との意見交換の中で、一般の先生を含む認識レベルの調査と、今後の啓蒙活動の手法の検討を行います。そして、②一般の先生、他の日本人向け教育機関へという横への広がり、③年齢層という縦の広がり、と方向性を確かめつつ進めていきます。④YMCAは当地で日本語を話す子供たちのためのキャンプなどの活動を提供し、ある程度の障害児童を受け入れること、NY教育相談所のバーンズ先生も活動に深く関わっていらっしゃる、日本のYMCAも

障害児童のサポートに熱心であることから、若い人たちがこの分野に興味を持つ人たちを増やしたいという意図での関係構築です。キャンプでは高校・大学の若者達がリーダーやカウンセラーとして、夏の2ヶ月以上の間子供達を世話して過ごします。その過程で、障害児童を担当した若者たちは、嫌でもこのケアの大切さを学びます。折角このような貴重な経験をした若者を放っておく手はありません。

⑤企業への認知度向上。月並みなテーマですが、海外では相当効果があります。というのは海外赴任の駐在員は会社を離れた横のつながり、家族間のつながりが日本よりもはるかに強いことによります。上に触れたYMCAでも、参加しているキャンパーの親同士の交流が自然に生まれていますし、子供たちに関する話題というのは、共通の話題として取り上げやすいテーマとなります。また、最近はやりのCSR(企業社会責任)という追い風もあり、NPO EDGEのサポートが海外主導で可能になることも夢ではありません。そのためにも、地道な広報・啓蒙活動を続ける必要があります。藤堂さん訪米などを利用して、保護者を対象としたセミナーなども開いていくつもりです。

このように、まだまだ活動というような段階には至っておりませんが、11月には藤堂さんにもNYに寄っていただき、疑似体験キットの使い方、教育現場の人向けのメッセージのポイント等を教わったり、セミナーやディスカッションを開いたり、と、現在計画中です。

英国のインディペンデント・スクールにおける SEN (Special Education Needs) について

Eton College Service Japan Office
代表 高月 壮平

英国を代表するパブリック・スクールであるイートン・カレッジ。開校は1440年に時の国王ヘンリー6世によって創立され、現在も25のハウスと呼ばれる学寮で男子生徒1270名が学んでいる。

イートン校には学習センターという特別なニーズの部門がある。そこでは専門的な経験や資格のある学習センター長と二人のパートタイムの先生によって、生徒の指導にあたっている。

学習センターではイートン校に入学した生徒で、DyslexiaやDyspraxiaのような特別な学習障害がある生徒をサポートしている。約4パーセントの生徒がこのセンターでサポートを受けていて、かなりの成果があがっている。小人数グループ、2人、あるいはマンツーマンで授業が行われる。SENに登録された生徒は、各教科の先生にSENを通して最新の情報を知らされ、先生方は教室での授業の中で、どのように進めるかをアドバイスしてもらっている。本稿

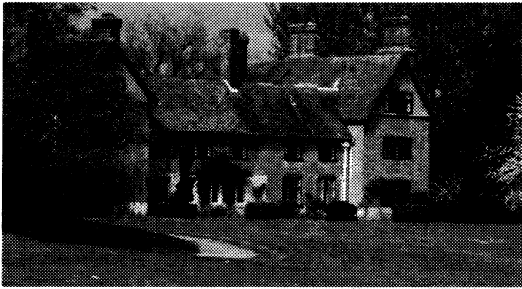
では、イギリスのSENの教育では優れた内容を持つ Stanbridge Earls Schoolの教育をレポートしてみた。

Stanbridge Earls School

スタンブリッジ・アールズ・スクールは、11歳から18歳の生徒のための、男女共学通学制および寄宿舎学校です。1952年に、ロムジーの北西、ニューフォレストの端にある52エーカーの森の中の現在の土地に創立されました。同校は、専用の滞在施設と共に、16世紀まで遡る以前のマナーハウスを改装、増築した建物を使用しています。

本校は、ディスレクシアや行動不全、計算障害、軽いアスペルガー症候群を含む特別な学習障害を持つ10~19歳の生徒のための、小規模な私立の男女共学制及び寄宿舎学校です。本校の学習促進センターでは、言語セラピストや第二言語としての英語を教える教員と共に、ディスレクシアのためのマンツーマンでの識字

専門家を擁しています。また、数学学習センターでは、7名の数学専門家がディスレクシアや計算障害者にマンツーマンのサポートを提供しています。ディスレクシアや計算力障害、行動不全、また、その他の特別な学習障害のある生徒には、初歩レベルのGCSEからAレベルまであらゆる種類のアカデミック、実践、職業訓練コースが用意されています。教員と生徒の割合は約1対6で、加えて、学習センターには25名強の専門家として訓練を受けた教員が在籍しています。



Main House

学習センターの各種機能

「識字能力」

ALC (学習促進センター)の主要な目的は、マンツーマンの教育が必要な生徒にそれを提供することです。時折、適切な場合には、少人数グループの学習も提供できます。

教員は、生徒の年齢に応じて様々な最新のテストを活用しながら、生徒たちを慎重に査定し、それまでの査定を基にした、また、個々人の必要を満たすように合わせた個別のプログラムを作成します。学習促進センターでは、様々なコンピュータ用のソフトと共に、多様な教材、バックアップのゲームや視聴覚教材を十分に提供でき、非常にめぐまれています。これらの資料は絶えず改正、改善されているため、センターは今でもディスレクシアの生徒への対策で最前線にいるのです。

「方法」

全てのディスレクシアの生徒を教えるのに適した唯一の方法はありません。したがって、全ての生徒は各自の特定のニーズを満たすように作成された個別の、多感覚を応用した、構造化言語プログラムを受けます。

再学習は私たちの取り組みの中で重要な要素であり、教員は同一の教材をいままでにない適切な方法で提示することに長けています。多感覚応用手法は、数多くのプログラムの土台となっており、教員は、生徒を向上させることを目的として、以前に学習した内容に基づいて進めていきます。プログラムには柔軟性があり、生徒は学習計画に携わるように促されます。目標設定は共同の作業で、どのような成功

にも称賛と励ましを受けます。

プログラムでは様々な異なる技法を取り入れ、識字能力を最大限に発達させるように設計されています。プログラムは、生徒個人のニーズに合わせて調節され、各自の強みと弱点の知識に基づいています。強みは最大限に活用され、弱点の分野を強化し、向上するために特別な課題が開発されています。特別な興味を追求し、授業の出発点として自身の語彙を使う数多くの機会があります。

プログラムには柔軟性があり、生徒のニーズの変化に見合うように適応することができます。私たちは生徒が必要とするであろうことを決して過小評価しませんし、また、過大評価もしません。感情的、知的、身体的そして社会的な成長は、個々の生徒に特有のもので、生徒は成功したり、励ましを受けたりするにつれ、その内容的な意欲が湧いてくるのです。これら全ては自信を育み、安全な環境で挑戦することを意図しています。教師と生徒との間の疎通に重点を置き、もし、個性がぶつかるようなことが起これば、指導は他の教師に変更されます。生徒が英語や数学、科学の授業から抜けることは決してありません。

数学学習センター

スタンブリッジ・アールズは独自に数学学習センターを持っています。生徒はこの分野で教育経験20年以上の教師陣に個人指導で教えられます。それぞれの教師は異なる専門分野を持ち、それらが全ての学習範囲に渡っています。何歳の生徒でも、またどのような能力を持つ生徒でも、特にディスレクシアや計算力障害、行動不全のような困難のある生徒にも対応できます。

通常、計算力障害のある生徒は科学や幾何学、芸術に秀でていますが、時間や方角、スケジュールを覚えることやゲームで記録をすることなど苦手です。計算力障害は最も基礎的な数の計算を理解し、覚えることが出来ないこともあります。長時間記憶を保持しておくことが余り出来ないため、ある日には複雑な数字の計算を行うことができますが、次の日にはその計算が全く分からないことがあります。

すべての生徒は温かく安心な環境で十分勉強できるように、センターは様々なゲームやコンピュータのソフトを備えています。個別学習プログラムは生徒各自のニーズや綿密なテストの結果に基づき、マンツーマンの授業を受けることを目的にして作成されています。彼らは基本的な数字や算数能力に集中する自信醸成期間の後、徐々に複雑なトピックに取り組み、GCSE (全国統一試験) や更に高レベルの試験まで、学習サポートを受けます。教えるために一つだけの指導方法は使いません。

追加授業を一つまたは二つ必要とする生徒には、朝

食や昼食の時間に、個人的に行われます。三つ以上の補習授業を必要とする生徒は、他の一つの授業は諦めて、通常時間内に教えられます。生徒たちは大切な余暇時間を避けるために、通常授業中に追加授業を選ぶこともあります。しかし、彼らが英語や数学、科学から抜けることはできません。

言語治療

本校のコミュニケーション能力センターには2名のセラピストが働いています。私たちが育成したいと思っているコミュニケーション能力にはスピーチ（音の認識）や言語（単語と文）、社会的相互作用を含めます。生徒が授業カリキュラムに対応し、他の人とうまく交流し合うことができるように支えることが目標です。彼は、個別授業や少人数グループ、授業サポートを含め、色々な環境で学んでいます。

作業療法

スタンブリッジ・アールズ校での作業治療は、生徒の協調性や個人的、社会的技能、学習能力を向上するためにお手伝いします。私たちは身体的、社会的な交流を治療法として活用しながら、個人の独立や自尊心を高めることを目標としています。各生徒の発達能力レベルを計るための標準テストを用いて、政府公認作業療法士に診断されます。その後、治療は個人的、または少人数グループで行なわれます。

補助教員は低学年（7年生）、向上した生徒（8及び9年生）、上級生への3段階プログラムを提供している運動機能プログラムでお手伝いいたします。習字が不得意な生徒には習字の授業が提供されます。特に低学年の生徒を優先します。

作業療法の部屋は広く、明るく、そして設備が整っています。生徒は身体のバランス、姿勢や意識の安定、行動耐性のような感覚筋肉を向上のために出席します。走ることやボールを蹴るなどの活動をする行動能力は、身体活動の発達への安全で、構造化された手法で支援されます。様々な身体活動を避けてきた生徒には、成功体験による自信回復が必要です。団体プログラムにおける他の生徒からのサポートは、互いに励まし合うことにより、建設的な補強剤になります。

遅れている能力を取り戻す機会は生徒に利益をもたらします。彼らは各自に合ったプログラムを学ぶうちに、自信を持ち始めます。生徒たちは新しい活動に挑戦することに興味があります。学習は、座っていることに対する忍耐の向上、疲労の減少、集中力の強化、視覚追跡の向上、視覚筋力の改善、空間意識・筋力計画の改善、自制心の強化などの効力が生まれます。

第二言語としての英語

第二言語としての英語（ESL）は学習促進センター（ALC）内で運営され、ケンブリッジTEFLAまたはトリニティー資格を持つ教員によって提供されています。授業はマンツーマンで行なわれます。生徒は個別の査定を受け、個人の特別なニーズを満たすように合わせた特別なプログラムを作成します。私たちには、最新で役に立つ資料やコンピューター用のソフトが豊富にあります。

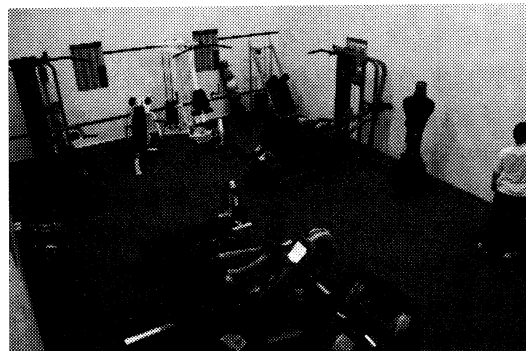
ESLには特別な資格を有する教員が居て、特別なニーズの必要な生徒にも対応できます。ESLの教員は、本校の2名の言語セラピスト同様、他の識字専門家と密接に連絡をとっています。

生徒には自分のレベルに合ったケンブリッジESOL試験を受けるように勧められています。過去にはKETやPET、FCE試験を受験した生徒もおります。また、TOEFL（米国での高等教育のため）やIELTS（一般レベルのみ）のための授業もあります。通常、生徒たちが特定の試験を受験希望の場合、可能な限り対応します。

スタンブリッジ・アールズ校のESL教員には、イギリスの学校環境で第二言語としての英語を学ぶ生徒との数年に及ぶ経験があります。科目特有の極めて重要な語彙をサポートします。私たちは、各科目の教員と面談して、生徒の学習に必要な単語リストやトピックを入手します。語彙の習得法は様々で、単語カードやマインドマップ、ノートの活用が行なわれています。適切な場合、ESLの教員が生徒の科目授業に立会い、授業内でもサポートすることもあります。これは非常に効果的で、成功しています。

時に広範囲な英語授業が必要なとき、サリスベリーの地元にある語学学校を使用することもあります。資格のある教員たちが、追加授業に参加する生徒を訪問し、指導することがあります。また、生徒によっては、英語能力が基準に満たない生徒はESLで学んだ後に、本校に入学します。

高月さんはエッジの創設者のお一人で、チャリティーコンサート、シェイウィッツ博士の講演会のコーディネーションなど現在でもエッジの活動に貢献していただいています。



LSA 体験レポート

LSA 2期生 大庭亜紀

はじめてAさんに会ったのは、すでに逃走中の全校集会。生徒や副校長先生に取り押さえられ私の自己紹介が終わってから、お願いしますと引き渡された。さっそく車いすを蹴飛ばそうとしたので『タイヤの数は何個でしょう?』と聞くと、ひたすら数を数えていた。『好きな電車は?』と聞くと『京浜急行』と答える。『1年1組の車庫に戻りましょう。』という、自分から列に戻って行った。

5時間の授業を他の子と同じように集中させるのはとても無理な状態だったので、1日のスケジュールを時計の絵と共にすべてイラストで表示。本人がイラストしたりパニックになりそうな時は、廊下や図書室でクールダウン。教室では奇声を上げず、おとなしく椅子に座っている姿が増えてきた。課題は5分できたら好きなお絵書き、また5分できたら折り紙。休み時間には作った紙飛行機を飛ばしたり、ボールで遊んだり私と一緒に過ごす。課題に集中できる時間は5分から10分15分と延ばしていった。お友達がAさんの描いた絵に興味をもって近づいてくる。Aさんはお友達を叩いてしまう。相手のお友達

には私がまず謝ってしまい、Aさんを別の場所に移動。教室に戻ったら『ごめんね。』言うことを伝える。素直に謝ってくれる回数が増えてきた。Aさんの絵が上手だからお友達が見に来たことを、落ち着いている時に伝えておく。最近、Aさんの周りに少しずつお友達が集まるようになってきた。

Aさんの情緒は、その日その時でとても変化をしよう。小さな変化を感じながら、こちらの矢印はシンプルに心掛けている。



SSTトレーナー養成講座を受けて

石上 東

SSTとは?親御さんにも子供にもわかるように説明して下さい。最終日先生が問われた事は、「如何に伝えるか」が SSTトレーナーに最も重要であり、ソーシャルスキルを培う事の究極の目的だということをお示し下さった様に思う。

SSTは形が決まっていて、これに沿って行いが、子供達をどう引きつけるか、その為の道具、使うタイミング、立ち位置、声の強弱、相手に流されずペースに引き込む意識、切り替えのスイッチ、安全面の配慮など、トレーナーがスキルを持ち合わせなければ、参加者不在となる。聞くは易く成し難し、のSST初日に比べ、2日目の発表との出来栄の差に、これら必要な点が際立った。

3日目。子供達にある場面を提示し、どのような対応が良いのか考えさせ、発表させるプログラム。熟考された発表にも難しさに突き当たる。Introductionで何をしたいのか伝える事の難しさ、場面の臨場感を感じてもらおうmodellingの演技力の大切さ、聞くも成すも実に難しいと実感する。

褒め言葉にしても、多くの語彙や言い回しを用意しておかなくては、こちらの思いも伝わらない。心の機微を豊かな日本語の表現に載せて伝えられる様に言葉に対しても日頃から敏感である必要がある。その上で、身体、表情、言葉を駆使し表現のバリエーションを増やしておく事が肝心だ。

事前の準備は丁寧、綿密、目的をしっかり踏まえプログラムを作成し、多くの場面を想定したりハースルを行う。子供への対応は幅広く、評価はだらか、そして反省は深く。子供達を導いてゆく為には、プログラムを遂行しようとする確固たる信念を持ち、多くの経験を重ねていかななくてはならないだろう。

しかし、人と人とのつながりは気持ちの伝え合い、心を寄せ合う事から始まる。困難を抱え出来ない事を伝えられずに困っている者に、出来ない事実に寄り添い 共感し得る気持ちこそが、子供達の心に響き、気持ちを「如何に伝えるか」の原動力になっていくのだと思う。

今回講座に参加協力してくれた子供達に感謝。

第7回 ディスレクシア 当事者会の報告から

息子さんが成人してからディスレクシアとわかり、対処の仕方を相談しにあるお母さんが参加されました。行きがかり上、参加した当事者2人（A氏、B氏とも常連で来てくださっている会員）が相談に乗ると言う形で話はすすめられました。

お母さん

「息子は検査を受けて、学習障害であることがわかって、すごく気持ちが楽になったと言っていますが、皆さんどうでした」

A氏「僕は学習障害ではなかったのですが、検査してもらって、アスペルガーと自閉症があることがわかり、気分が楽になりました」

B氏「そうだったのか、やっぱり漢字やアルファベットを覚えられなかったのはこんな病気だったのだとわかり、スッキリしました」

お母さん

「この前、息子が電話をとったら、アダルトサイトからのもので、しばらく続けて請求書が届いて困りました。電話の対応は苦手ですか」

A氏「僕は雑音で神経を集中できないのですが、ときどき電話の会話をしているうちに切れてしまいます。嫌な電話は途中で聞くのが辛いので、切ってしまいます」

B氏「一生懸命、相手が言ってくることを聴こうとするから、営業電話もなかなか断れなくて困っています」

お母さん

「うちの息子なんか、書くのが苦手で業務日誌がうまく書けないで、仕事をやめたこともあります。書類を書くのにすごく時間がかかります」

A氏「僕はよく書類に書く内容を理解するのに時間がかかり、面倒くさいですね。レポートを書くだけで、一日の仕事の大半のエネルギーを使う感じです」

B氏「書類を書くときはまずだれかに見せてから、書きます。失敗することがわかっているのだから、あらかじめ多めに書類をもらっておきます」

お母さん

「うちの息子はせっかく就職したのに、友だちが出来なくて、やめてしまいました。皆さん職場の人間関係は上手く行っていますか」

A氏「上司は嫌いですが、会社の同僚は私と同じようにADHD、LDの人々が多く、居心地がいいので、それほど苦になりません」

B氏「ときどき、同僚との空気が読めなくて、失敗しますが、だいたいうまくやっています。」

お母さん

「いいですね。うちの息子はバイクに乗り回し、悪い友だちとつき合っていました。いつも友だちによ

く思われようとして、悪いことも進んでやっています」

A氏「僕は自転車に乗れるようになるのに、普通より時間がかかったし、自動車の運転免許だって持っていません。バイクに乗れるって、運動神経がよくないと出来ませんよ。あの試験に受かるんだから、すごいですよ」

お母さん

「何回も模擬テストを受けたんですから。字なんか読まなくても、繰り返してやっていると覚えていたみたい」

B氏「それでも試験に受かるんだから、すごい。バイクに乗れるって、すばらしいことですよ。それを悪い方向に使わなければいいのです」

お母さん

「どうしても出来ることがあると、私も主人も、『やればできる』と言って励ましたつもりだったんですが。息子は辛かったみたいですね。皆さんはどんなご両親でしたか」

A氏「父親は黙っているタイプで、母親は細かいことにするさい人間です。両親は発達障害とわかっていて、小学校に入ると多動が治まったので、その後ほったらかしでした。正直な話、高校時代ぐらいに、僕に発達障害があることを告知してほしかったです。でも、今は普通にやっています」

B氏「父親も、母親も小さいころ、口うるさかったです。ただ、小学校時代、悪さをするので苦情の電話が家にかかってきて、母親には苦勞をかけた。仕事をやるようになってから別になにも言いません。今は普通に仲良くやっています」

お母さん

「お二人とも社会人として、仕事をして生活をされている。ご両親がしっかりされています。息子を見守って行くことが大切だとわかりました。やっぱり家庭が大切なのですね」

欲を出し、自分の能力を考えないで、さらに実力以上のことを求めるから苦しくなって、ますます悩んでしまいます。当事者も家族方も、「足る」を知ることこそ、楽に生きる方法ではないでしょうか。当事者会を一年主催させていただき、最も痛切に感じました。

文責：柴田

インターンシップを終えて

照山 絢子

年が明けたばかりの1月下旬、雪降り積もるアメリカはミシガン州の大学寮から、EDGEのホームページに記載されたメールアドレスに宛てて、初めてメールを出しました。

「夏休みにそちらでインターンシップをさせていたけないでしょうか…？」

募集告知が出ていたわけでもないのに、まさか了承していただけるとは思ってもおらず、まもなくお返事を頂戴したときにはとても嬉しく思いました。

何度かのメールのやりとりを通してプログラムを組んでいただき、7月の初めから約6週間にわたってEDGEの事務局でインターンをする事になりました。英語教室でのお手伝い、英語教授法に関するマニュアルの翻訳及び内容検討、ディスレクシア診断ツールの開発チームのお手伝いなどをはじめとして、LSA育成講座やソーシャルスキルトレーニング講座なども受講させていただき、本当にたくさん貴重な経験をさせていただきました。藤堂さんのいらっしゃるにはどこにでも一緒にお邪魔し、「研修生」としてご紹介いただいて、たくさんの方々のお話を伺う機会を得ることもできました。藤堂さ

んはじめ事務局のスタッフの皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。

私はミシガン大学大学院の博士課程で文化人類学を専攻しています。ディスレクシアが日本の歴史的・文化的な背景を踏まえてどのように意味づけられ、社会に理解され、制度に反映されようとしているのかを研究しています。これは実践的な研究とは異なり、ディスレクシアで辛さを抱えている人への答えをすぐに提示できるような研究ではありません。が、私たちの社会を、今後ディスレクシアをはじめとする学習障害の困難さを持つ方たちにとって、より暮らしやすくしていくためには、ぜひ考えなければならないことです。

今回のインターンシップを通して、現場に携わるたくさんの方々のお話を伺えたことは、私にとって大きな財産となっています。この機会をくださったEDGEの皆様へ改めて感謝するとともに、私なりに、研究成果という形でいつかお返しできればと思っています。

EDGE 活動報告と予定

7月4日	港区民生委員研修会にて講演	10月7,8日	日本LD学会（札幌）に参加
7月5日	米沢市が個別支援室を視察	10月27~29日	マッケンジー・ソープ画伯来日 (愛を運ぶ人キャンペーン)
7月11日	臨時理事会開催	11月1日	江東区教育センターにて講演
7月21, 23, 24, 25, 27日	ソーシャルスキルトレーニング・トレーナー 養成講座	11月6日	臨時理事会開催
7月22日	タッチタイピング講習会	11月8日	渋谷区が個別支援室を視察
8月7日	学習支援員養成講座第3期を開講 (9月27日まで14日間)	11月8~10日	International Dyslexia Association 大会に参加（藤堂）
8月19, 20日	日本発達性ディスレクシア研究会 (筑波)に参加	11月20日	江東区教育センターにて講演
		12月4日	臨時理事会開催
		12月10日	JDDネットフォーラム

JDD ネットのシンポジウムを担当します

日本発達障害支援ネットワーク(JDDネット)は、12月10日(日)に成蹊大学においてフォーラムを開催します。EDGEは以下の内容で企画シンポジウムの一つを担当しますので、皆様のご参加をお願いします。

「発達障害児、特別支援教育への支援—NPOの出来ること」

学習支援員派遣事業、就労支援・不登校児への支援、当事者のメッセージ

事務所を移転しました

エッジの事務所は永く六本木交差点近くの「みなとNPOハウス」に所在しましたが、9月末をもって浜松町に移転しました。新しい事務所の所在地は次のとおりです。移転に伴い電話番号も変わりますので、ご留意下さい。

〒105-0013 東京都港区浜松町1-20-2 村瀬ビル3F

電話

03-6240-0670・0672

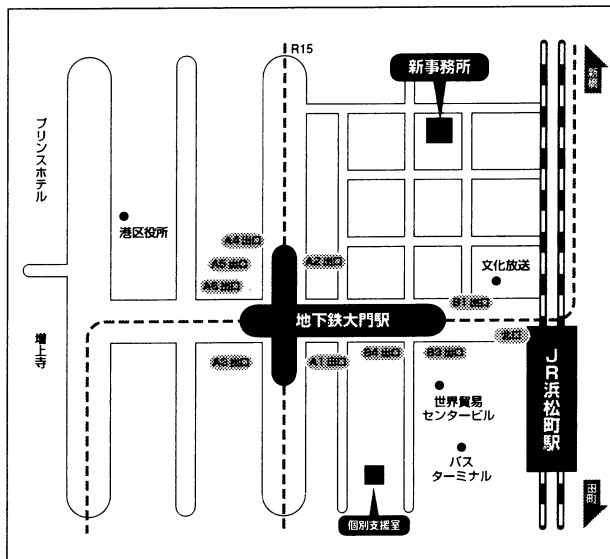
FAX

03-6240-0671

交通

JR「浜松町」駅北口

都営地下鉄浅草線・大江戸線「大門」駅B1出口より徒歩5分



愛をはこぶ人キャンペーン

今年もこのニュースレターがお手元に届く、晩秋の10月21日(土)～30日(月)にマッケンジー・ソープさんの来日絵画展がホテルオークラ東京別館1階ロビーで開催されます。また、28日(土)14時～15時には、ソープさん自身も来場します。生のソープさんの作品に接することのできる数少ない機会です。ソープさんの作品は、印刷された画集やインターネットの映像でも、その力は十分に伝わってきます。これはソープさんの作品の持つ力であると同時に画家マッケンジー・ソープの人物の魅力でもあります。それゆえ、彼の生の作品を見ること、その人柄に直接に接することは格別の体験でもあり、きっと、新しい何かを発見することでしょう。

う。それが、ひとつの「小さなきっかけ」になることでしょう。ひとりでも多くのみなさまのご来場をお待ちしています。

「愛をはこぶ人キャンペーン」の事務局は10月2日(月)に浜松町に移転しました。場所は新しいEDGEの事務所内です。同時にHPが新しくなりました。

URL:www.aiwohakobu.jp

また、ブログもよろしく。

<http://blog.livedoor.jp/aiwohakobu/>

※皆様のお手元にこの冊子が届くころには絵画展は終了しておりますが、キャンペーンは続いておりますので引き続きご協力をお願いいたします。

愛をはこぶ人キャンペーン
www.aiwohakobu.jp
マッケンジー・ソープ 来日絵画展
希望書
2006.10.21日 → 30日
11:00～20:00 (最終日は18:00 終了)

Report from the EDGE -第12号-

2006年10月25日発行

発行者 NPO法人EDGE

発行責任者 藤堂栄子 東京都港区浜松町1-20-2
村瀬ビル3F

Tel.03-6240-0670・0672 Fax.03-6240-0671

編集 NPO法人EDGE事務局 柴田章弘

印刷 株式会社 信英堂

<http://www.npo-edge.jp>

http://blog.livedoor.jp/npo_egde/

[email:info@npo-edge.jp](mailto:info@npo-edge.jp)